



## 温暖化への理解 さらに深める教育を

小西 一也

熱波や豪雨、干ばつや森林火災などの増加によって、温暖化による気候の変化が認識されるようになりました。一方、アメリカではトランプ氏が大統領選に当選し、脱炭素の枠組みを定めたパリ協定からの離脱を宣言するなど、温暖化は、残念ながら、世界を分断する大きな要素の一つともなっているようです。

2018年にIPCC（気候変動に関する政府間パネル）は「1.5℃特別報告書」で、それ以前よりはるかに厳しい温室効果ガス排出削減の必要性を提示し、世界はいつに脱炭素へ動き出しました。

2020年に、菅首相（当時）が脱炭素宣言をし、2021年にIPCCの第6次評価報告書において「人間の影響が大气、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」ことが明記されました。さらに同年、眞鍋淑郎氏が温暖化シミュレーションの業績に対してノーベル物理学賞を受賞。この間、わずか一年です。

「脱炭素」に対するコンセンサスは、数年でかなり進みましたが、やや性急すぎた部分もあったのではないかと感じています。脱炭素は、化石燃料の利用をやめるという、歴史的な大転換であり、世界のあらゆる利害関係に大きな影響を与える政策だからです。

とはいえ、それに見合うほど、温暖化に対する理解が社会的に進んでいるとも思えません。たとえば温暖化は新しい科学で、コンピューターシミュレーションの中の現象だと思っている人もいます。しかしスヴァ

ンテ・アレニウス（1859～1927、1903年ノーベル化学賞）が120年前に、大気中の二酸化炭素が2倍になると4℃気温上昇すると予想していて、これはIPCCの最新の予測の範囲内です。また、気温上昇だけでなく、温室効果ガスの増加によって起こると予想された、成層圏温度の低下、北極温暖化（地球全体の平均の3倍程度）なども半世紀を越えて検証されています。

教える立場として私が感じるのは、子どもたちが、あらゆる科学的な問題をもっと積極的に考え、解決に向けた判断ができるようになることの重要性です。

現在、高校理科の基礎科目は、物化生地の4科目のうち、基本的に3科目を履修することになっていますが、理事の縣秀彦氏（国立天文台）が代表を務める「理科基礎検討研究グループ」では、4科目を融合させることで、温暖化や感染症など具体的な社会課題、エネルギーなどの抽象的な概念の獲得を目指すカリキュラムの提案を行っています。

すでに3つのカリキュラム案を作成し、高校での授業実践、教育関係者を集めてのシンポジウム、報告書の作成、文部科学省や中央教育審議会、日本学術会議などへのはたらきかけを行っているところです。私も参加させてもらっていて、温暖化のカリキュラム案の提案や授業実践などを行っています。

脱炭素への理解が広がるためにも、このような取り組みが、あらゆる場面で進めばと思っています。

（会員／私立浅野中学校・高等学校教諭）

## CONTENTS

|              |    |
|--------------|----|
| 巻頭言          | 1  |
| ニュース         |    |
| 総会報告         | 2  |
| J賞2025受賞者決まる | 4  |
| J賞選考委員講評     | 6  |
| J賞20周年特集     | 8  |
| ニュース         |    |
| 30周年記念誌座談会   | 10 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 世界会議（南アフリカ）       | 10 |
| 例会報告（2月）高瀬寛さんに聞く  | 11 |
| 例会報告（3月）水野素子さんに聞く | 12 |
| 例会報告（4月）福和伸夫さんに聞く | 13 |
| オピニオン／賛助会員        | 14 |
| 理事会から／賛助会員        | 15 |
| 事務局だより            | 16 |

## 予算・人事案を承認 25年度総会

日本科学技術ジャーナリスト会議の2025年度総会を5月27日に日本プレスセンタービルで開催した。オンライン併用のハイブリッド形式で開いた。

会場参加の正会員は26人（総会開会時）、オンライン参加13人（同）。議長に議決権を委任した会員が43人、事前の議決権者が6人と合わせて88人となり、定足数（正会員225人の5分の1以上）を満たした。24年度活動報告と決算報告、25年度事業計画と予算案、理事・監事選任の各議案について会長と各委員長、塾長らが説明、質疑応答を経てすべての議案が承認された。

総会冒頭に室山哲也会長が各委員会の活発な活動と効率的な運営が定着した1年だったと振り返り、新年度は創設31年目の新しいスタートを切る1年になると述べた。

### ■月例会などの開催（室山哲也・企画委員長）

24年度は月例会10回、見学会2回を開催した。25年度は月例会の存在感を高めるためにも、オンラインを活用するなどし南海トラフ地震の課題などタイムリーなテーマを取り上げていくとした。

### ■会報・ウェブなどによる情報発信（瀧澤美奈子・編集広報委員長）

会報4回発行のほかSNSによる情報発信に努めた。25年度はSNSの双方向性を活かした活動に挑みたいとした。

### ■科学ジャーナリスト賞（元村有希子・科学ジャーナリスト賞委員長）

賞の創設以来、選考委員を務めてこられた白川英樹さんが勇退し石原安野さん（千葉大学教授）が選考委員に就任すること、またJ賞20周年記念のブックフェアと高校生作文コンクールの開催について説明した。



2025年度総会の風景（日本プレスセンター、井内千穂撮影）

26年度の募集・選考では応募締め切りの変更を検討している。

### ■科学ジャーナリスト塾（高橋真理子・科学ジャーナリスト塾長）

24年度（22期）は社会人中心に21人が受講。取材実習で国立極地研と南極観測船「しらせ」を訪問した。25年度（23期）は例年通り9月の開塾を予定している。

### ■国際活動（小出重幸・国際委員長）

24年11月に世界科学ジャーナリスト連盟年次総会が開かれ小出委員長が参加した。25年12月の科学ジャーナリスト世界会議南アフリカ大会の開催が正式に承認された。

### ■特別プロジェクト

佐藤年緒理事が30周年記念誌の制作状況に関し説明した。PDF版で公表予定。小出重幸理事が新型コロナパンデミックの総括で『次のパンデミックに向けた報道とコミュニケーション提言』をまとめ公表したことと、各地の自治体が公表した新型コロナ報告書の分析に関する活動を継続することなどを説明した。

### ■24年度決算と25年度予算（滝順一・事務局長）

24年度は収入・支出とも前年度を100万円ほど上まわった。会員増に加え、JASTJ創設30周年記念パーティーの開催、科学ジャーナリスト賞20周年記念高校生作文コンクールの開催準備という2つの記念事業実施に伴い、会費収入や寄付等が増えるとともに支出も増えたためだ。単年度収支は約8万円の黒字となった。

25年度は作文コンクール開催と30周年記念誌などに予算を計上、財政基盤を固めるため新会員の勧誘等に積極的に取り組む。

25年12月に南アフリカで開く科学ジャーナリスト世界会議への参加支援のため寄付募集活動を展開する。

### ■理事・監事の選任

飯島裕一、大池淳一、鴨志田公男、倉澤治雄、高木鞠生の5氏の理事が退任し、泉大知、亀松太郎、菊池結貴子、瀬川至朗、ラオちぐさの5氏を新理事として選任した。他の理事、監事は再任された。

### ■意見交換

会員名簿の配布を希望する意見が会員から出されたのに対し、事務局は個人情報保護の観点から配布はせず個別の問い合わせに答えたいとした。

## ❖総会報告

### 2024年度 決算報告（単位は円） 報告期間 2024年4月～2025年4月

| 収入      |                                                                | 支出            |                               |
|---------|----------------------------------------------------------------|---------------|-------------------------------|
| 前年度繰越金  | 3,995,689                                                      | 費目            | 摘要                            |
| 会費収入    | 正会員（225名）<br>賛助会員（22社24口）                                      | 事務局職員給与       | 558,560                       |
|         | 2,430,000<br>2,880,000                                         | 事務所家賃         | 1,076,964                     |
|         |                                                                | 会議費           | (総会、理事会等会議室借用)<br>79,134      |
|         |                                                                | 交際費           | (懇親会)<br>833,596              |
| 会費小計    | 5,310,000                                                      | 備品・消耗品費       | (文具、郵送代、OA機器等)<br>40,054      |
| その他の収入  | 参加費（月例会、懇親会等）<br>創立30周年パーティ会費<br>ジャーナリスト塾会費<br>寄付<br>雑収入<br>利子 | 通信費           | (メール管理料等)<br>306,579          |
|         | 142,276<br>365,400<br>491,852<br>295,600<br>8,030<br>1,028     | 支払手数料         | (振込手数料、ビジネスWEB)<br>65,535     |
|         |                                                                | 源泉徴収税         | (講師料など)<br>43,775             |
|         |                                                                | 事務局総務委員会予備費   | (会計作業費、総務関係費、交通費など)<br>98,102 |
|         |                                                                | 雑費            | 0                             |
|         |                                                                | 管理関係小計        | 3,102,299                     |
|         |                                                                | 企画委員会(月例会)    | (会場費、講師代等)<br>698,142         |
|         |                                                                | 科学ジャーナリスト塾    | (会場費、講師代等)<br>472,517         |
|         |                                                                | 編集委員会         | (4回会報発行分、HP運営費)<br>938,162    |
|         |                                                                | 国際委員会         | (世界連盟会費等)<br>304,225          |
|         |                                                                | 科学ジャーナリスト賞委員会 | (会場費、選考謝礼、書籍、郵送等)<br>857,538  |
|         |                                                                | 委員会予備費        | (特別プロジェクト費)<br>161,323        |
| その他小計   | 1,304,186                                                      | 委員会小計         | 3,431,907                     |
| 当年度収入合計 | 6,614,186                                                      | 当年度支出合計       | 6,534,206                     |
|         |                                                                | 収支            | 79,980                        |
|         |                                                                | 次年度繰越金        | 4,075,669                     |

### 2025年度 予算計画（単位は円）

| 収入      |                                                | 支出              |                                    |
|---------|------------------------------------------------|-----------------|------------------------------------|
| 前年度繰越金  | 3,669,157                                      | 費目              | 摘要                                 |
| 会費収入    | 正会員<br>賛助会員                                    | 事務局職員給与         | 700,000                            |
|         | 2,880,000<br>2,880,000                         | 事務所家賃           | 1,200,000                          |
|         |                                                | 会議費             | (総会、理事会等会議室借用)<br>100,000          |
|         |                                                | 交際費             | (懇親会)<br>50,000                    |
| 会費小計    | 5,760,000                                      | 備品・消耗品費         | (文具、郵送代、OA機器等)<br>50,000           |
| その他の収入  | 参加費（月例会、懇親会等）<br>ジャーナリスト塾会費<br>寄付<br>雑収入<br>利子 | 通信費             | (電話、メール管理料)<br>200,000             |
|         | 100,000<br>500,000<br>500,000<br>20,000<br>0   | 支払手数料           | (振込手数料、ビジネスWEB)<br>70,000          |
|         |                                                | 源泉徴収税           | (講師料など)<br>50,000                  |
|         |                                                | 事務局総務委員会予備費     | (会計作業費、総務関係費、交通費など)<br>100,000     |
|         |                                                | J賞20周年作文コンクール   | 300,000                            |
|         |                                                | 管理関係小計          | 2,820,000                          |
|         |                                                | 企画委員会(月例会)      | (会場費、講師代など)<br>700,000             |
|         |                                                | 企画委員会(ジャーナリスト塾) | (会場費、講師代など)<br>500,000             |
|         |                                                | 編集委員会           | (4回会報発行分、HP運営費)<br>900,000         |
|         |                                                | 国際委員会           | (世界連盟会費等)<br>600,000               |
|         |                                                | 科学ジャーナリスト賞委員会   | (会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等)<br>800,000 |
|         |                                                | 委員会予備費          | (各委員会予備費、特別プロジェクト費)<br>120,000     |
| その他小計   | 1,120,000                                      | 委員会小計           | 3,620,000                          |
| 当年度収入合計 | 6,880,000                                      | 当年度支出合計         | 6,440,000                          |
|         |                                                | 収支              | 440,000                            |
|         |                                                | 次年度繰越金          | 4,109,157                          |

### 2025年度の理事及び監事と主な担当

|           |           |                |          |               |               |
|-----------|-----------|----------------|----------|---------------|---------------|
| 会長        | 室山 哲也     |                | 理事       | 寺沢 和洋         | 企画、J塾         |
| 副会長       | 内城 喜貴(新)  | 企画委員長、編集広報     |          | 都丸 亜希         | J塾、編集広報、J賞、企画 |
|           | 柏野 裕美     | 総務（DX）、J塾、国際   |          | 中道 徹          | 総務、J賞         |
|           | 小出 重幸     | 国際委員長、編集広報、企画  |          | 西野 博喜         | J賞            |
|           | 高橋 真理子    | J塾長、国際         |          | 長谷川 聖治        | 国際、企画、総務      |
|           | 瀧澤 美奈子    | 編集広報委員長        |          | 藤田 貢崇         | 総務（システム）      |
| 事務局長      | 滝 順一      | 総務委員長、J賞       |          | 三井 誠          | J賞            |
| 会報・Web編集長 | 瀧澤 美奈子    | 会報編集長          |          | 宮野 きぬ         | 企画、国際         |
| 理事        | 縣 秀彦      | 企画             |          | 三輪 佳子         | 編集広報、企画、国際    |
|           | 井内 千穂     | J塾、編集広報、国際     |          | 村松 秀          | J賞、企画（web）    |
|           | 泉 大知（新）   | 企画（委員長代理）      | 元村 有希子   | J賞委員長、企画（web） |               |
|           | 井上 能行     | 編集広報           | 森 時彦     | 企画（委員長代理）、総務  |               |
|           | 亀松 太郎(新)  | 企画、編集広報、総務（DX） | 山本 威一郎   | 総務（財務、設備等）    |               |
|           | 菊池 結貴子（新） | J賞             | ラオちぐさ（新） | 総務            |               |
|           | 佐藤 年緒     | 総務、編集広報        | 監事       | 北村 行孝         | 佐藤 征夫         |
|           | 佐々 義子     | J賞             | 顧問       | 武部 俊一         | 飯島 裕一（新）      |
|           | 瀬川 至朗（新）  | J塾             |          | 牧野 賢治         | 高木 靱生（新）      |

注) 50音順。(新)は新任。各理事が所属する委員会は、企画、編集広報、科学ジャーナリスト賞(J賞)、国際、総務、J塾の6委員会体制。

(特記) \*会報製作体制(新) 会報編集長:瀧澤 会報デスク:鴨志田、杉村(会員) デスク業務を行う 会報編集委員会(編集方針や企画出し):鴨志田、杉村、佐藤、三輪、内城、井上+α

## 「大賞」は前野さんの「バッタを倒すぜ」 優秀賞2作品と特別賞も

「科学ジャーナリスト賞2025」の最終選考会を4月5日に日本プレスセンタービルで開き、「大賞」に農学者の前野ウルド浩太郎さんの著書「バッタを倒すぜ アフリカで」を選んだ。優秀賞はノンフィクション作家の前野真嗣さんの著作「奔流 コロナ『専門家』はなぜ消されたのか」と、NHKスペシャル「量子もつれ アインシュタイン最後の謎」の2作品に贈ることを決めた。また特別賞を福島民友新聞の長期連載「坪倉先生の放射線教室」に贈る。

科学ジャーナリスト賞（J賞）は優れた科学報道や著作、コミュニケーション活動などを顕彰する目的で創設され、今回で20回目。総数61作品（書籍30、映像18、新聞8、展示2、ウェブ3）の応募があり、最終選考では一次選考を通過した10作品（書籍5、映像4、新聞1）が選考対象となった。

大賞の「バッタ」は冗舌な語り口で読者を引き込む力がある。多彩すぎるとも思えるエピソードが物語全体を分断して読みにくいとの評もあったが、選考委員の多くが高く評価。ベストセラーだった同じ著者の前作の続編であることも踏まえた上でなお「大賞」に値すると判断した。

「量子もつれ」は、直感的な理解が容易でない「量子の世界」をできるだけわかりやすく映像化したような試みだといえる。わかりやすかったかと問われれば必ずしもそうとは言えないというのが選考委員の一致した見解だったが、制作者のチャレンジ精神を高く評価した。

「奔流」は議論になった。尾身茂氏による新型コロナの著作を昨年優秀賞に選んでおり「今年も？」との抵抗感が選考委員の中にあったからだ。しかしジャーナリストの視点で同じ事象を描いた本作は、尾身氏の著作とむしろ対を成すと捉え、コロナ検証を考えるうえで意義深いと判断した。

「放射線教室」は500回を超える連載が継続中で、J賞2025の募集対象期間を大きくはみ出している。紹介されている知識に目新しいものは少なく、同内容の繰り返しも目につく。やさしい言葉で不安に寄り添う記事を連載し続けてきた著者と編集者の根気と熱意に敬意を表し「特別賞」とした。

白川英樹・筑波大学名誉教授が今回で選考委員を退くことになった。選考終了後、白川先生は「毎年、（たくさんの）候補作が届くと、もうこれで最後にしたいと思うのだが、この選考会での議論が毎回楽しいので20年続いた。非ジャーナリスト5人とジャーナリスト5人の間でのバトルのような議論を通じ、ジャーナリストの考え方ははじめいろいろなことを学ぶことができた」と、20年を振り返ってあいさつした。

白川先生には2006年の第1回選考から毎年、貴重な意見を頂いてきた。長きにわたるご協力に改めて感謝を申し上げたい。

7月5日の贈呈式に出席される予定で、その後、今年秋に選考を迎える「J賞20周年記念高校生作文コンクール」の選考委員を引き受けていただいている。  
（事務局長 滝順一）

### 科学ジャーナリスト賞 2025 受賞作品

|     | 作品名                              | 著者・制作者              | ジャンル |
|-----|----------------------------------|---------------------|------|
| 大賞  | バッタを倒すぜ アフリカで                    | 前野ウルド浩太郎            | 書籍   |
| 優秀賞 | 奔流 コロナ「専門家」はなぜ消されたのか             | 広野真嗣                | 書籍   |
| 優秀賞 | NHKスペシャル<br>「量子もつれ アインシュタイン最後の謎」 | NHK「量子もつれ」<br>制作チーム | 映像   |
| 特別賞 | 坪倉先生の放射線教室                       | 坪倉正治                | 新聞   |

外部選考委員（敬称略）：相澤益男、浅島誠、大隅典子、小林傳司、白川英樹  
JASTJ選考委員（同）：佐々義子、三井誠、村松秀、元村有希子（選考委員長）

## 多彩な形式の作品巡り活発な議論

「科学ジャーナリスト賞2025」の最終選考会にあたった有識者選考委員の皆さんから受賞作品の講評をいただいた。書籍や映像、新聞、ウェブなど多彩な形式でテーマも多岐にわたる作品を、それぞれの委員の視点から評価していただいた。

### 全体講評

### 科学ジャーナリズムを担う・支える

大隅 典子

科学ジャーナリスト賞（J賞）は、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた個人（グループの場合は代表者）に授与されるが、ジャーナリストのみならず、博物館での展示やウェブサイトに関わった方、科学者や科学コミュニケーターも対象となる。



今回は、日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）会員・非会員から推薦を受けた61の応募作品について、会員からの評価も踏まえ、J賞委員会メンバーと事務局の議論（5回のオンライン会議）により、書籍5冊、映像4作品、新聞1作品が最終選考に選ばれた。最終審査員はジャーナリスト系の委員と科学者の委員が半々で多様性に富み、選考会議は毎回、侃々諤々の議論となる。映像作品のうち、残念ながら選に漏れた「サイレントフォールアウト」は、米国ネバダ州の核実験の影響を独自に調べた「シチズンサイエンス」を取り上げた意欲的な作品。その活動の中心となったのは女性医師であり、伊東英朗監督が米国で自主上映も行った点は注目に値する。

特別賞となった「坪倉先生の放射線教室」は、東日本大震災以来、福島県で働く坪倉正治医師によるコラム。福島民友新聞で10年間、500回にわたる連載は、地味ながら地域の人々に重要な情報を届ける

という大事な使命を担っている。

書籍が2作品選ばれたが、そのうち久しぶりの「大賞」となったのは「バッタを倒すぜ アフリカで」（光文社新書）。著者は国の研究所で主任研究員を務める前野ウルド浩太郎氏。すでに前作「バッタを倒しにアフリカへ」（光文社新書）は25万部のベストセラーで新書大賞等を受賞している。科学者の使命は、研究成果を挙げて専門的な論文や書籍として世に出すことだが、自らの独自の体験を一般書として著すことも、科学コミュニケーションの重要なスタイルといえる。

20回目となるJ賞を介して、さまざまな科学を伝える人々、支える人々に光が当たることを願う。

（東北大学教授）

### 「バッタを倒すぜ アフリカで」講評

### 若き研究者の熱意と苦闘と成果までの実録

浅島 誠

著者が13年間アフリカでサバクトビバッタの繁殖行動を調査し、そのプロセスをまとめた本である。野外調査ゆえの過酷な研究環境、資金難など数多くの困難を乗り越え、研究



者としての熱い心を持ち続け、並々ならぬ意欲、そして観察力を遺憾なく発揮し、サバクトビバッタ繁殖行動のメカニズムを明らかにした研究現場の実録である。論文1行の裏側では膨大な実験や観察が行われており、その詳細を事細かに、そして研究者の心情も織り交ぜながらテンポよく述べられている。

生態学、特に野外生物学は現場で観察し、仮説を立てながら検証を進めて行く、その研究過程を詳細に記録している。著者が明らかにしたバッタの大繁殖行動は、生態学の基礎研究ではあるが、今後、アフリカで大発生し、農作物を食い荒らすバッタによ

る被害を減少させる可能性を示唆している。

著者は今まで、これに類する本を刊行しているが、論文として発表されていない内容を公的にできないというジレンマがあった。今回は研究成果を世界トップレベルの国際誌に発表することができ、本書では研究内容まで立ち入ることが可能となったため、充実した内容で刊行できた。

また、この著書で特筆すべきは、研究者本人にしか書けない研究事情や心情が多く記載されていることである。研究を進める上での仲間との関係、研究費の獲得、論文を投稿してから発表までの大変さ、研究ポストを得る難しさなど、一般の多くの読者にも研究者の実態の一部を伝えることができていると思う。取り繕うこともせずに、思ったこと、感じたこと、失敗談や苦勞したことなどを包み隠さずに吐露することで、読者の関心を研究者や研究内容、論文へと誘い、引き付けていく力を高く評価したい。

生物学を研究している評者として も、一緒に砂漠でフィールドワークをしている感覚を読後に感じた、良書である。

(東京大学名誉教授、帝京大学特任教授)

#### 「奔流 コロナ『専門家』はなぜ消されたのか」講評

### 「作動中の科学」と社会とのかかわり問う

小林 傳司

3年に及ぶ新型コロナウイルスのパンデミックは、2023年5月に新型コロナウイルス感染症法上の2類から5類への変更をもって日常に戻った。しかしこの間、多くの感染者と死亡者を生



み、感染対策や治療を含む医療体制のみならず、危機管理における専門家の活用の点でも大きな課題を突き付けた。パンデミックの再来は不可避と言われる中、日本社会はどのような教訓をつかみ取り、次に備える体制ができているのかが問われている。

昨年、尾身茂氏の「1100日間の葛藤 新型コロナ・

パンデミック、専門家たちの記録」に授賞した。授賞は前年の出版物を対象としているため、2024年1月出版の広野氏の本書は、今年の本賞の選考対象となった。しかし尾身氏のものと並んで検討されるべき力作である。

両書とも、パンデミックの危機管理に際して、専門家の助言はどうあるべきかに焦点を当てている。尾身氏のは、まさに渦中に専門家として対応した経験をもとにした記録として、極めて貴重なものである。広野氏のは、ジャーナリストの立場から尾身氏への10回にわたるインタビューに加え、押谷仁氏、西浦博氏ら政府の感染症対策にかかわった専門家の行動と苦悩を丹念に追い、重要な問題を提起している。

科学的に未知の部分が多く、その対策も不確実さを免れない状況が続いたが、これは解明に取り組む科学の試行錯誤を具現した「作動中の科学」の姿であった。しかし政治や社会の側は専門家に今すぐここで使える助言を求める。科学的に不確実な状況で専門家の役割はどうあるべきか、専門家の助言は具体的な政策とどのようにかわるべきかという問いは難問であり、各国が試行錯誤したが解決を見た国はない。だからこそ社会全体でこの問いに取り組み、未来に備えることが重要である。本書は尾身氏の著作と並んで、その手掛かりを与えてくれる重要なルポルタージュである。それにしても、パンデミック後の彼ら・彼女ら専門家への処遇は何かならないものかと思う。

(大阪大学名誉教授)

#### 「量子もつれ アインシュタイン最後の謎」講評

### 量子の世界に向き合う

相澤益男

2022年ノーベル物理学賞は、「量子もつれ」を実験で検証した3人の科学者、ジョン・クラウザー、アラン・アスペ、アントン・ツァイリンガーに授与された。量子の世界の本質に迫った画期的な基礎研究で



あるが、多くの人には内容がさっぱり分らない。

「量子もつれ アインシュタイン最後の謎」は、周到な企画を積み重ね、難解な量子の世界を分かり易く解き明かした、秀逸な映像作品である。

そもそも量子の世界を実感することは極めて難しい。かのアインシュタインでさえ大きな疑問を投げかけている。それが「アインシュタイン最後の謎」である。量子の応用研究の目覚ましい進展に比べ、この難問に関わるような基礎研究は長い間据え置かれてきた。

1900年代の半ば、デビッド・ボームが果敢な取り組みを始めた。続いて、ボームの論文に刺激されたジョン・ベルが「ベルの不等式」を提唱。これを契機に、クラウザーやアスペが実験での検証に動き出す。実験ということになれば、何を、どんな装置で測るのか、基礎研究と言っても実体をつかみやすくなってくる。それでも研究費の獲得は難しく、厳しい研究環境を乗り越え、信念を貫いて目標を達成している。ただ、こうした研究室における実験では、量子もつれの可能性を示唆するにとどまり、確証には至らない。

ツァイリッガーの実験は壮大だ。宇宙の果てと果てにある天体の点滅を、2つの天文台で検出するという構想である。実験は見事に成功し、2つの量子がお互いにどんな距離に離れていても、片方の量子の状態が変わると、もう一方の状態も瞬時に変わるという、量子もつれの存在が検証された。さらにこの実験は、ある情報を量子に埋め込み、それを離れた場所にあるもう一方の量子に瞬時に伝えることができる、「量子テレポーテーション」の実証でもあったという。

映像作品ならではの分かり易さに助けられ、量子の世界に楽しく向き合うことが出来たことにいささか興奮気味である。

(東京科学大学名誉教授、旧東京工業大学元学長)

「坪倉先生の放射線教室」講評

## 福島県民の安心と 偏見解消につながる連載

白川英樹

東京電力福島第1原発事故に伴い放出された放射線による健康への影響を懸念する福島県民に向け

て、放射線とは何か、放射線の生体への影響はどうかなどの難しい諸問題を、正しく理解してもらうことを願って始めた400字ほどの短いコラム記事である。2015年1月13日から日曜日(299回から土曜日)に掲載され、現在も続いている。



坪倉氏は血液内科を専門とする医師で、原発事故後に福島県に入り、内部被ばく検査などを実施すると共に、放射線の健康への影響などについて福島県民に説明を続けている。

連載当初は原発事故直後の放射線被ばくに伴う健康への影響や、放射線とはそもそもなんなのかという基礎的なことや、放射線と放射性物質の違いや、放射能を測る単位にはベクレルとシーベルトがあり、ベクレルは放射線を出す力(単純には放射性物質の量)の単位、シーベルトは人体への影響の大きさの単位であることなどを話題の中心にして丁寧に説明している。

その後、回数を経るに従い処理水、再稼働、放射性廃棄物、原子力に関する防災対策など、原子力発電に関するもろもろの話題を取りあげて、被災した多くの県民が安心して生活ができて、無用な偏見や差別を少しでも払拭する手助けとなるように、理解が難しい原子力や放射線などの物理学分野の諸問題を優しい言葉で解説している。

放射線を受けないに越したことがないと思っている人が多いが、自然界には一定の放射線が飛びかっており、常に外部被曝を受けているばかりでなく、我々の体内にも放射性同位元素が存在し、そこから出る放射線による内部被ばくを受けている。しかし、この限りでは健康には何ら影響はないこと、従って放射線を受けるか受けないかの問題ではなく、その受けた量が問題であること、現状では放射線被ばくによる影響は限定的で心配することはないが、むしろ精神的な影響や生活環境が変わったことによる健康への影響、生活習慣病、とりわけ糖尿病が甚大であることを伝えている。

このコラム記事は複数年度にわたっているのも、特別賞に値すると評価した。(筑波大学名誉教授)

## 「高校生作文コンクール」の作品募集中

若い世代と共有したい科学への期待と課題

科学ジャーナリスト賞（J賞）が2025年度に20回目を迎える。J賞を多くの人に知ってもらうとともに、これまでの受賞作を若い世代にも読んでもらうべく、「J賞20周年記念高校生作文コンクール」を企画した。

### ▶科学ジャーナリズムの活性化のために

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は2005年の総会でJ賞の新設を決定し、翌2006年に第1回の表彰を行った。以来毎年、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた人を表彰している。新聞、テレビ、出版だけでなく、ウェブサイトや映像、博物館での展示まで幅広くとらえ、優れた啓蒙書を著した科学者や科学技術コミュニケーターなども対象とする。社会的なインパクトがあることを重視して選考されてきた。



「高校生作文コンクール」の課題図書。（左）『情報バンデミック—あなたを惑わすものの正体』読売新聞大阪本社社会部著／中央公論新社、（中）『江戸の骨は語る—甦った宣教師シドッチのDNA』篠田謙一著／岩波書店、（右）『生命の星の条件を探る』阿部豊著／文春文庫

### ▶「高校生作文コンクール」のねらい

J賞受賞作の書籍を高校生に読んだらどう感じるのだろう。科学に向ける彼らの眼差しや夢を共有できないか。そんな思いから「高校生作文コンクール」を開催する運びとなった。

課題図書に選んだのは、読売新聞大阪本社社会部による『情報バンデミック—あなたを惑わすものの正体』（中央公論新社）、篠田謙一著『江戸の骨は語る—甦った宣教師シドッチのDNA』（岩波書店）、阿部豊著『生命の星の条件を探る』（文春文庫）の3冊。高校生でも読みやすく、入手容易かつ手頃な価格で、分野のバランスも考慮した選択だ。

課題図書のうち少なくとも1冊を読んで、科学や技術に対する自分の考えや抱いていた夢がどう変わったか、また、科学技術の発展と私たちの社会・生活の未来などをテーマに、考えたことや提案したい意見を書いてもらう。

募集は2025年8月末まで。10月に選考委員会を開き、優秀作品3点を選ぶ。（理事 滝順一）

**寄付のお願い**／「高校生作文コンクール」の選考や贈呈式に必要な費用を賄うために募金を受け付けています。次世代の人材育成と科学ジャーナリズムのさらなる発展のために、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄付をいただける場合は、①金額、②寄付者お名前（担当者が別の場合は担当者のお名前も）、③連絡先電話番号、④連絡先メールアドレス、⑤ご要望事項をmirai@jastj.jpまでお知らせください。1口1万円としますが、1口未満のご寄付も歓迎します。

## 科学好きの高校生がつくばに集結

科学技術振興機構（JST）が主催する「科学の甲子園全国大会」が3月下旬、つくば国際会議場（茨城県つくば市）で開催され、科学好きの高校生たちが切磋琢磨するチーム戦が展開された。

都道府県大会を勝ち抜いた47の代表校が、6～8人のチームを組んで筆記試験と3種目の実技競技に挑んだ。3月24日の表彰式では、各賞の学校名が呼ばれるたびに大きな歓声があがった。

優勝した東京都立小石川中等教育学校の生徒7人のうち、「科学好き仲良し3人組」は中学時代にJSTの「科学の甲子園ジュニア」でも全国優勝した経験を持つ。彼らを巻き込みつつ、別の生徒の「この指とまれ」で仲間が集まった。中高一貫で理数教育に注力し

ている同校が、挑戦の環境を整えることで生徒たちの主体性を育てているのが伝わってくる。記者会見では、生徒たちが互いの発言を聞きながら屈託なく笑う姿が印象的だった。「このメンバーはみんな自分の意見を持っていて、意見が対立することもあったが、最後までみんなで一緒にやりきれた」という声に、若者たちの大きな可能性を感じる。



第14回科学の甲子園全国大会で優勝した東京都立小石川中等教育学校の生徒たち（撮影：井内千穂）

14回目となる今大会には全国717校、8,158人の生徒が参加した。47校が一堂に会した3月21日の開会式後にJASTJの室山哲也会長が登壇し、「私たちとともに科学の未来を考える高校生を求めています」と会場の生徒たちに「高校生作文コンクール」への応募を呼びかけた。（理事 井内千穂）

# 教養なき専門家の危うさ——科学史家の警鐘

J賞20周年記念 村上陽一郎さん講演会

科学ジャーナリスト賞（J賞）20周年を記念して、東京大学名誉教授で科学史家・科学哲学者の村上陽一郎さんを講師に迎えた特別講演会が4月23日、東京のジュンク堂書店池袋本店で開かれた。J賞選考委員を長く務めた村上さんは、「専門家とは何か」と題して、専門家と社会のあるべき関係について歴史を踏まえて鋭く論じた。

## ▶リベラルアーツの提唱者が投げかけた疑問

「ニュートンはサイエンティストではなかった」。村上さんは意外な事実を口にした。サイエンティスト（Scientist）という言葉が生まれたのは、ニュートンの没後100年の19世紀半ばだからだ。

この新語には「科学しか研究しない人」という含意があった。裏を返せば、自然科学を研究する者は本来、文学や哲学、芸術などを含めた幅広い教養を身につけるべきという学問の伝統がある。

そんな「教養重視」の姿勢は、第二次大戦前後のアメリカでリベラルアーツの重要性を説いたハッチنزの「専門家が無教養であり、自らの領域以外の事柄に無知であってよいはずはない」という言葉にもあらわれていると、村上さんは指摘する。

だが、科学者の好奇心を原動力とした専門化は止まることを知らない。

20世紀には科学が力を得て、化学兵器や核兵器が軍事目的で活用されるに至った。他方で、科学の細分化はさらに進み、科学者たちは閉鎖的な共同体の中で、狭い分野の深掘り競争を展開した。

転機が訪れたのは1975年。生命科学の急激な発展によって遺伝子操作の倫理性が社会問題となったころ、アメリカのアシロマに100人以上の生物学者が集まって会議を開き、無軌道な研究に自ら歯止めをかける提言をしたのだ。



J賞選考委員を長く務めた  
村上陽一郎さん（撮影：都丸亜希子）

## ▶「非専門家の声」を専門家に届ける重要性

この会議をきっかけに、研究者の所属機関に設けられた審査委員会（非専門家も含む）の承認を得なければ、生命倫理に関わる実験を始められないという制度が導入された。

村上さんはこのアシロマ会議の決議について「従来の科学者の常識からすれば、非常にラディカルな決定だった」と高く評価する。さらに、アメリカのAIDS患者と家族が作った団体の支援活動を例に挙げ、「専門化が極端に進んだ社会では、非専門家が専門家に向けて提言する重要性が高まっている」と語った。

専門家と非専門家をつなぐ存在といえば、ジャーナリストの出番だ。その使命について、村上さんは「専門家に匹敵する専門的な知識と非専門家に関する知識の両方を持つ必要がある」と要望する。J賞の過去の実績はその期待に応えるものだろう。（理事 亀松太郎）

## J賞20周年記念 ブックフェアを開催

### 科学の二つの顔を知り、 伝えること

東京のジュンク堂池袋本店で4月1日から5月31日まで、過去の科学ジャーナリスト賞受賞作を集めたブックフェアが開催された。理工書フロアの一角に、「科学ジャーナリストが薦める『科学の本』」という掲示とともに、科学の本が陳列された。

科学と、科学を基盤にした新しい技術は、社会に深く浸透し私たちの生活を支えているが、それゆえにさまざまな歓迎されない影響をももたらしている。「そんな『科学の二つの顔』を知り、伝えること」が重要だというメッセージと、書棚に並んだ力作は、科学の醍醐味と課題の両面を深く伝えようとするジャーナリストや研究者の熱い息吹を伝えていた。



J賞20周年ブックフェアの書棚  
（撮影：都丸亜希子）

## 30周年誌編集でZOOM座談会

JASTJ設立30周年の記念誌づくりを進めてきた編集チームは5月14日、編集作業のまとめとして「これからの科学ジャーナリストは何を目指すか」をテーマにZoom座談会を開いた。AI時代における科学ジャーナリズムやJASTJの役割など活発な意見が交わされた。

参加したのは編集メンバー、理事ら計16人。戦中派から若手まで3世代で構成するようになったJASTJであり、座談会では新会員が第一世代の会員に問いかけ、まずは初代会長（岸田純之介氏）が掲げたJASTJの「3つの役割」が果たされたのかどうかを質された。

「3つの役割」とは①世界の科学ジャーナリストとつながり・交流、②新聞放送出版などで孤立しがちな科学ジャーナリストのための組織を超えた交流の枠組み、③ニュースを情報源とは異なる角度から眺め、分析するテクノロジーアセスメント（TA）の機能一であった。答えは①②の「ジャーナリストの交流は達成し、成長もした」が、③のTAは難しかったという。

ただTAについては、国家や企業の巨大プロジェクトに対して「技術を吟味する科学ジャーナリストの使命はますます高まっている」と意義があらためて強調された。その点、「事前の評価」ではなく「事後」ではあったが、東電福島原発事故をめぐる政府、国会、民間などの4報告書を、「何でも検証プロジェクト」で発足したチームが分析、評価し出版した経験などから、今後も「検証」の役割に期待する発言が続いた。

JASTJ設立翌年の1995年は日本で「インターネット元年」、ネット環境が影響してきた30年間でもある。ネット情報で偽情報や誹謗中傷が拡散もする。ネットに詳しいメンバーからは弊害だけでなく、可能性に言及するなど、「AIとどう向き合い、活用するか」の議論が続いた。答えは一様でなかったが、「どんな技術にもプラスの面とマイナスの面がある。もう留めようない環境の中でどうするかを考えたい」と現代課題に取り組む決意が述べられた。詳しくは追ってホームページでも公表される記念誌をご覧ください。（理事 佐藤年緒）

## 2025年南アフリカ世界会議に向けて

南アフリカ・プレトリアで12月1日～5日、第13回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ2025）が開かれる。世界会議では、科学ジャーナリズムや科学コミュニケーションが抱えるさまざまな問題点について、世界各国から参加する科学ジャーナリストたちが幅広く議論する。今回のテーマは、「科学ジャーナリズムと社会正義 — 回復力を促進する私たちの役割」。

プログラム提案の募集に応じて、JASTJからは次のCBRNE（化学、生物学、放射線、核、爆発物）災害にジャーナリストはどう備えるべきかを考える「福島からCOVIDへ — CBRNE災害におけるジャーナリストの役割」と題したセッション案を提出したところだ。

また、世界会議に先立ち、世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）は2月にWFSJ2025 ソーシャルメディア・ゲストエディター・プログラムを立ち上げた。XやLinkedInなどのプラットフォームで、加盟

各国のイベント、会議、賞、フェローシップ、助成金、プロジェクト、出版物、トレーニングなどに関する投稿を見ることができる。JASTJも7月下旬と11月の投稿を予定している。

JASTJは、1992年に第1回科学ジャーナリスト世界会議が東京で開催されたことがきっかけで設立されたという歴史がある。世界各国の科学ジャーナリストたちとつながり、情報交流するために、南アフリカ世界会議に多くの日本人が参加できることを願い、私も初めて参加してみたいと考えている。

（理事 井内千穂）

**寄付のお願い**／JASTJの選考を通った方の費用の一部を支援するために、寄付を募っております。支援を受けた方には、JASTJ会報などで世界会議の様子を報告していただきます。ぜひ、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。寄付の要領は、8ページ「高校生作文コンクール」と同じですが、宛先のメールアドレスはkifu@jastj.jpです。

## 実装できるか量子コンピューター、現状とその期待

OptQC株式会社の高瀬寛さんに聞く

これまでの常識を覆す「量子コンピューター」。従来のコンピューターと、どう異なり、どんなことができるのか。そして今、どのような段階で、どんな未来が待っているか。新しい技術に対する期待は尽きない。2月5日の例会は量子コンピューター研究の最前線に行く東京大学古澤研究室発のスタートアップ企業、OptQC（オプトキューシー）代表取締役CEOの高瀬寛さんに「“究極の量子コンピューター” 開発に挑む」と題して話を聞いた。

### 電力供給問題が関係

コンピューターの処理能力は年々加速的に上がっているのに、なぜ量子コンピューターの開発が必要なのか。これは電力供給問題が関係するという。従来型の速さは、1秒間の処理数が多いほどCPUの処理能力が高い。しかし、この方法は発熱量が多くなり、消費電力も増える。1台あたりの発熱量を減らすにはコンピューターの数を増やすことになり、大型化が進む。これが従来型コンピューターの高速化だ。

人類が使いたいデータは増加の一途をたどっている。近い将来、コンピューターが消費するエネルギーが、世界で生産されるエネルギーに等しくなるような時代が来るとまで言われているという。この解決策として、注目されているのが量子コンピューターだという。量子コンピューターに期待されるのは、高度なアプリケーションを実現し、従来型が不得意とすることへの解決策だ。例えば、配達の経路や金融ポートフォリオ、人員や物の配置、スケジューリングといった最適化問題。機械学習の学習モデルの効率化、新薬の開発のような実験系の絞り込みのためのシミュレーションなどだ。「計算が早くなるので、スマートな社会に変わっていくだろう」と高瀬さん。

### 量子のなせる技

量子コンピューターの計算が早いのは、アルゴリズム的に早いからである。一番短いステップで計算を終えることができるからだ。これは、従来型が電圧・電流で行っていたことを量子が行うからで、量



量子コンピューターでの起業について「社会的使命」と意気込みを語った高瀬寛さん（撮影 都丸亜希子）

子とは、原子や電子、光の粒である光子などのことであり、量子力学の法則に沿った振る舞いをする。例えば、複数の状態を重ね合わせて表現できる「量子ビット」。一方の状態を観測した瞬間に、もう一方の状態が決まる「量子もつれ」。こういった量子の振る舞いによって、情報のやり取りの効率が上がる。技術的に難しい原因は、量子ビットが壊れやすいことにある。課題は、量子を保護しながら計算する工夫が必要であることと壊れやすいのでコピーができないことだ。

OptQC株式会社では、光を使った量子コンピューターの開発を行っている。光は移動が早く、通信に向いているため、「量子テレポーテーション」という、量子もつれを利用して情報を瞬時に移動させる操作に向いている。高瀬さんは、古澤研究室でこの操作の効率を上げる研究をしてきた。光は、常温・大気圧で操作が可能であるため、ハードウェアのサイズをコンパクトにできる。しかし、まだ商用レベルの光量子ビットの生成には至っていない。

質疑応答で高瀬さんは「10年後には、量子コンピューターをAI並みに流行らせたいと関係者の多くは考えている」と回答。「技術者出身でも、日本で、こんなに大成功できるんだ、ということを示すことが、僕の社会的使命の一つだと思う」と述べて講話を終えた。（理事 都丸亜希子）

## どう創る？ 科学技術立国の未来 「宇宙かあさん」の挑戦

日本は科学技術先進国として存続できるのか。多くの国民が悲観的な見方をする中、技術立国復活を力強く訴えるのが「宇宙かあさん」こと水野素子氏（現参議院議員）だ。3月7日の月例会はこれまでの宇宙政策の専門家としての歩みを振り返り、技術立国のための提言を話してもらった。

### 宇宙政策の専門家として

水野氏は1994年に東京大学法学部を卒業。旧宇宙開発事業団（現国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構〔JAXA〕）に入社した。国際宇宙ステーション実現のための国際交渉や、宇宙ベンチャーを目指す人々の支援業務などを担当した。その後、法務・コンプライアンス課長などの要職を歴任することになるが、子育てをしながら課長職を務めていくことの難しさを痛感したという。

日本の宇宙戦略や、労働環境に対して疑問を感じることが多くなり、政界に打って出ることを決断。二度の落選を経験した後、2022年の参議院議員選挙で当選した。

### 必要な科学的思考と現場尊重

政治の世界に入って痛感するのは、科学的思考と現場を尊重した政策の必要性だという。特に宇宙ビジネスの発展のためには、政策が必要不可欠であり、また宇宙法の理解も重要となってくる。

宇宙法は、宇宙に関連する法の総体であり、大き

く国際宇宙法と国内宇宙法に大別される。前者は宇宙条約などが相当する。

宇宙条約は、1966年に採択（翌年発効）され、宇宙活動の自由や、領有禁止など宇宙の基本法とも言えるものだ。

ただ、宇宙条約が成立した時は、宇宙ビジネスを前提としていない。ビジネスの具体的な担保措置は国内法に委ねられることになるが、日本で宇宙基本法が成立したのは2008年と遅かった。

水野氏は、日本では、科学技術・ベンチャーの現場を理解している政治家がほとんどいないと強調した。そして、志ある人が安心して宇宙ビジネスに挑戦していけるように、法整備や政策提言を行っていききたいと意気込みを語った。

### 「ものづくりがカッコいい」と 思われる社会を

水野氏は理工系人材をどう育成していくかについても指摘している。今の日本では、標準を重んじ、高等学校普通科から大学へと進学していくルートを選ぶ生徒が多い。しかしルートの標準化は、生徒が総合偏差値だけを重視するようになり、子どもたちの多様性や個性を潰すことにもなるのだという。

水野氏は、高等専門学校や、工業高校・農業高校などに早期専門教育を充実させ、「俺は職人となって良いものを作る」と自信を持って言う生徒が出てくるようにすべきと考えている。このような「日本版マイスター制度」とも言える教育を導入することは、生徒の個性を伸ばすことにもつながるという。そして、理工系人材が多く育成されるようになれば、技術立国の目標も近づくという。

確かに、技術者や職人を大切にする価値観を日本社会に根付かせること、理工系人材を育成していくことはとても大切なことだ。ただ、水野氏は、高等専門学校や工業高校の復権を掲げているが、人々の価値観を変えることは並大抵のことではない。早期専門教育が、本当に生徒の個性を伸ばすものであるのかは、今後も議論が必要だろう。

講演後の質疑応答では、技術立国に向けた意気込みはよく分かるが、実現のための具体策を問う質問が複数出された。（J塾第22期生／高校教諭 山崎久登）



「これからの政策には科学的思考と現場尊重の姿勢が必要」と訴える水野素子氏（撮影 瀧澤美奈子）

## 南海トラフ地震を考える ～防災対策とメディアの役割～

「一人の死は悲しみである、しかし100万の死は統計である」という冷徹な格言がある。2024年8月8日に政府が発令した南海トラフ地震臨情報は、日本という国が存亡の危機に立たされていることを改めて浮き彫りにした。4月15日に開いた月例会では名古屋大学の福和伸夫名誉教授を招き、最悪のケースで死者29万8000人、災害関連死5万人以上に上ると想定された「南海トラフ地震」について聞いた。

### 被害想定はGDPの半分にも

福和さんは「南海トラフ地震臨時情報」の制度設計や被害想定分析を主導するだけでなく、一人でも多くの命を救うため、地域に入り込んで啓蒙を続けるエバンジェリストである。冒頭、福和さんはこの日の会場になった日本プレスセンターについて、「こんな危険なところには来たくなかった」とストレートパンチを食らわせた。今年3月に改訂された南海トラフ地震の被害想定によると経済的損失は292兆円と、GDPの約半分に達するという。

「南海トラフ地震」の被害は関東地方にも及ぶ。とりわけ長周期地震動は東京の軟弱地盤に建つ高層ビルを襲う。福和さんは2025年3月、ミャンマーで発生したマグニチュード7.7の地震でタイ・バンコクの高層ビルが崩れる動画を示しながら、「これと全く同じなのが東京だ」と警告。「南海トラフ地震の時の東京を見たくない」とまで言い放った。さらに防災インフラでもあるメディアについて、「本社の大半が都内の高層ビルにある。『何を考えているのか』と初めに言っておきたい」とボディーブローを浴びせた。

### 進めぬ耐震化と強靱化

被害想定見直しの過程で行政の建物は耐震化が進んでいるが、企業や個人の建物は耐震化が進んでいないことが明らかになった。このため被害想定は12年前の32万人から29万8000人とほとんど減っていない。津波による死者は21.5万人と想定される。一方、事前防災による被害軽減の努力によって、7割は削減できると強調する。もちろん次に来る「南海トラフ地震」が最

大クラスとなるかどうかはわからない。また「南海トラフ地震情報」は「地震予知はできない」との前提に立っており、発生時期を予見することはできない。

福和さんが提唱する事前防災は極めてシンプルだ。第一に徹底した耐震化と強靱化。しかし産業や生活を支える重要インフラである港湾施設の耐震化は遅々と

して進んでいないと指摘する。第二は危険を避ける土地利用である。軟弱な地盤に高層ビルを建て、住んではいけない沿岸部の低地に住宅が密集する現実には警鐘を鳴らす。第三は過密の解消だ。人が集まれば被害も大きくなる。「東京の人口を減らさなければ日本の未来はない」とまで言い切った。

### 「メディアは国民を叱れ」

月例会の趣旨は防災で果たすメディアの役割を正面から問うことにある。現地で取材するテレビ高知の竹内一政記者と、キー局であるTBSで防災を担当する福島隆史記者が参加してくれた。高知県では最大34cmの津波が想定されている。NHK、民放を含め、放送事業者には放送法108条で災害発生を予防し、被害を軽減するための放送が義務付けられている。NHKの参加が得られなかったことは残念であり、今後の課題である。

竹内記者からは2024年8月の「臨時情報」をどう伝えたか、また住民の行動変容を促すための日常的な放送について紹介があった。一方、福島記者からは「臨時情報」が出ても行動を起こさない人の割合が増えており、「行動変容を起こした人が損をする事態が生じつつある」と懸念を示した。

メディアの役割について福和さんは、事前防災が「総力戦」であると強調したうえで、行政や住民、企業が本気になるために「メディアが国民を叱ってほしい」と語った。「一番本気になってほしいのが学者でありメディアだ」と講演を結んだ。質疑を含めて、衝撃の2時間となった。（会員 倉澤治雄）



「事前防災は総力戦で」と訴える福和さん（撮影 瀧澤美奈子）

管理教育下優等生は権威に弱い。為政者の欺瞞に気づくほど、それにしがうか、勝ち馬に乗るタイミングをはかる付度精神を育まれているゆえだろうか。法人化された地方国立大学の同僚、学生たちの参与観察から、その傾向の強まりに危惧を覚える。

民主主義が弱化した現場では、政府が決めたことだ、失敗しても責任は管理職（国立大学なら学部長、学長）、文科省にあるなどと、責任放棄・諦めがたやすい。処世術を磨ける場ではあるものの、知恵を集めよりよい判断・問題解決を探る機会も、事実にもとづいた検証の機会も失われ、協調性は集団の学習力を低下させていくようにはたらいいていく。「私たちはヒトラーにしたがっていただけだ」とナチス政権下のエリートたちが戦後ドイツで権威主義をいわけにしていたのが思い出されるではないか。

学術会議法人化法案は、本来期待されているはずの役割から学術をますます遠ざけてしまいかねない。一例だが、水俣病問題は学術的には答えがでて久しい。汚染魚を食べ、医師からメチル水銀中毒症関連症状があり蓋然性9割以上で水俣病だと診断を受けた患者たちが被害を訴えているのに、熊本県、鹿児島県、新潟県・市の認定審査会は、環境省通達を根拠に水俣病とは認めようとしない。だから裁判となるが、科学と法理どおりしばしば水俣病患者は水俣病であるとの判決がでる。それでも環境省は、医系技官を先頭に学者を動員、自治体を操作し、最後の患者が死ぬか諦めるまで争う姿勢を崩さない。

困窮者の日常の感動ポルノ的報道に留まっいては、すでにある被害放置解決法が諦観に覆われ、活かされないままになりかねない。（会員 林衛）

## JASTJをサポートする 賛助会員・団体一覧

（50音順、2025年6月現在）

|                                                                                                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <b>JAMSTEC</b> 国立研究開発法人<br>海洋研究開発機構<br>Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology<br><br>国立研究開発法人 海洋研究開発機構 |  <b>構造計画研究所</b><br>KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.<br><br>株式会社構造計画研究所                                          |
|  <b>kao</b><br><br>花王株式会社                                                                                             |  <b>CIEM</b> 公益財団法人 実中研<br>Central Institute for Experimental<br>Medicine and Life Science<br><br>公益財団法人 実中研 |
|  <b>JST</b> 国立研究開発法人<br>科学技術振興機構<br>Japan Science and Technology Agency<br><br>国立研究開発法人 科学技術振興機構                      |  <b>情報・システム研究機構</b><br>Research Organization of Information and Systems<br><br>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機関         |
| <b>CACTUS</b><br><br>カクタス・コミュニケーションズ株式会社                                                                                                                                                                 | <br><br>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会                                                                                   |
|  <b>KEK</b><br>高エネルギー加速器研究機構<br><br>大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構                                                          |  <b>TECH VENTURE</b><br><br>株式会社テックベンチャー総研                                                                   |

## 理事会から

3月理事会は3月4日午後7時からオンラインで開いた。滝事務局長が各委員長・塾長に総会議案書掲載の事業報告と新年度事業計画案の提出を求めた。J賞2025の一次選考会を2月20日に開き最終選考に残す10作品を決めたと事務局長が報告した。J賞20周年記念高校生作文コンクールについては東京理科大学理数教育研究センターと東京都市大学の共催が決まった。またJ賞ブックフェアは4月にジュンク堂池袋本店での開催が決まったとの報告があった。高橋塾長から22期の修了式と懇親会を2月26日に開催、盛況のうちに今期の日程を終えたとの報告があった。小出国際委員長から科学ジャーナリスト世界会議南アフリカ大会への参加支援のための寄付募集を始めたとの報告があった。佐藤理事から30周年記念誌への寄稿に関し理事への協力要請があった。

4月理事会は4月1日午後7時からオンラインで開いた。滝事務局長が24年度決算、25年度予算案を含む総会議案書の内容を説明し了承を得た。事務局長から3月21日より高校生作文コンクールの募集を開始、同日に室山会長が「科学の甲子園」全国大会でPRを行ったとの報告があった。7月例会は核軍縮をテーマにするとの事務局長からの提案が了承された。小出委員長から世界科学ジャーナリスト連盟から依頼されたコラム執筆のエディターを井内理事に委嘱したとの報告があった。

5月27日の総会後に開いた5月理事会では、退任・新任理事が挨拶。会長、副会長など役職と委員会等の担当を決めた。J賞最終選考委員について元村委員長から石原安野千葉大学教授を選任したとの報告があった。

|                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <p>いのちをつなぐ<br/><b>SARAYA</b></p> <p>東京サラヤ株式会社</p>                                       |  <p><b>農研機構</b><br/>NARO 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構</p> <p>独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構</p>                            |
|  <p><b>東京理科大学</b><br/>Tokyo University of Science</p> <p>東京理科大学</p>                    | <p>ひとりを守る みんなを守る</p> <p><b>BIKEN</b></p> <p>一般財団法人 阪大微生物病研究会</p>                                                                                                                                 |
| <p><b>TOSHIBA</b></p> <p>株式会社東芝</p>                                                                                                                                       |  <p>国立研究開発法人<br/><b>物質・材料研究機構</b><br/>National Institute for Materials Science</p> <p>国立研究開発法人 物質・材料研究機構</p> |
|  <p><b>株式会社 日本医工研究所</b><br/>Japan Medical Engineering Institute</p> <p>株式会社日本医工研究所</p> |  <p><b>理化学研究所</b></p> <p>国立研究開発法人理化学研究所</p>                                                                   |
|  <p>JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE<br/><b>日本学術振興会</b></p> <p>日本学術振興会</p>   |  <p><b>QST</b></p> <p>国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>                                                              |
|  <p>一般社団法人 <b>日本溶接協会</b><br/>JMES</p> <p>一般社団法人 日本溶接協会</p>                             | <p><b>ROHTO</b></p> <p>ロート製薬株式会社</p>                                                                                                                                                             |

## ■ 新入会員の自己紹介

### ● 竹田 有里

大学では情報数理学を専攻したものの、新卒で東京ローカルテレビ局『TOKYO MX』にお世話になりました。警視庁、都庁、国交省、自民党など社会部や政治部の記者を担当しつつ、入社から退社まで続けた分野が気象災害と気候変動です。気候変動や自然科学について学びたいと思い、取材の合間を縫って（サボって?）大学院へ。global environmental studies を修了。東日本大震災後、災害報道番組『検証！首都防災』を立ち上げプロデューサー、JAL×東京都×MX『sacred eco journey』ディレクター兼リポーターを歴任。退職後、文化放送『斉藤一美ニュースワイドサキドリ』サブキャスター、with『竹田有里のゆるりなSDGs』を連載、フジテレビ『環境クライシス』ディレクター兼リポーター、ヨコハマSDGsデザインセンターのコーディネーター。世界初『木のストロー』を発案し、環境教育を実施。

乳幼児を2人抱えており、なかなか思うように仕事できていませんが、幅広く科学について知見を得たいと思い、入会を希望させていただきました。よろしくお願いします。

### ● 勝田 敏彦（高エネルギー加速器研究機構）

朝日新聞社で20年以上、主に科学技術を担当する記者をしていました。現在は茨城県つくば市にある国立研究所、高エネルギー加速器研究機構の広報室長をしています。現在、ジャーナリストとしての仕事はあまりしていませんが、業務としては隣接領域であり、重なるところも多いので学びたいと思っています。

### ● 田淵 義朗（生成AI田淵塾、株式会社ソーシャルメディアリスク研究所代表取締役）

1956年神戸生まれ。宝島社で編集者、その後独立。現在、生成AI田淵塾を主宰。情報セキュリティコンサルタント。SNSを中心とするソーシャルメディアの活用とリスク、個人情報保護に関して本を書いたり記事を執筆したりしています。

### ● 今中 秀光（宝塚市立病院 集中治療救急室）

1983年に大阪大学を卒業し、集中治療医として大阪大学、国立循環器病センター、徳島大学、宝塚市立病

院に約10年ずつ勤務しています。現在ICU室長兼、特命病院院長です。趣味の合気道は、学生の頃よりも熱心に稽古しております。

### ● 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

農研機構（のうけんきこう）は、我が国の農業と食品産業の発展のため、基礎から応用まで幅広い分野で研究開発を行う国立研究開発法人です。約3,200人の職員を全国各地の研究拠点に配置し、農と食のイノベーションを目指して活動しています。

### 退会

太田 泰弘、大西 隼、田村真紀夫、日本アイソトープ協会

## ■ お知らせ

### ● JASTJ会員向けメールングリスト(ML)は3種類あります。

#### ①公式ML info-jastj@jastj.jp

件名に[JASTJ]からのお知らせが入る。全会員対象。月例会の案内など。JASTJ事務局のみが発信できる。

#### ②告知ML kokuchi-jastj@jastj.jp

件名に[kokuchi-jastj:]が入る。受信を希望する会員のみがメンバーで、メンバーは誰でも②のアドレスに送ることでイベント告知などができる。告知MLは発信専用です。返信はできないので注意してください。

#### ③広場ML hiroba-jastj@jastj.jp

件名に[hiroba-jastj:]が入る。受信を希望する会員のみがメンバーで、メンバーは③のアドレスに送ったり、返信したりすることで自由にやりとりができる。

※ ※ ※

ML利用のルールなどは、<https://jastj.jp/about/service/>に書いてありますのでご一読ください。疑問点などありましたら、事務局(hello@jastj.jp)まで連絡してください。

### 編集 後記

▶トランプ政権がアカデミアに圧力をかけています。その影響は看過できません。しかし米国民の大多数が望む変化とは考えにくく、民主主義を強固にする過程と期待したいです。全体主義と決定的に異なるのは言論の尊重に他なりません。JASTJも多様な会員を擁し、その尊重の精神は会報にも反映されています。私たちの共通言語がエビデンス重視の科学であることが、是々非々の議論を可能にする強みだと考えています。(美)

## 編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**  
Japanese Association of Science  
& Technology Journalists (JASTJ)

〒100-0011 東京都千代田区幸町2-2-1  
日本プレスセンタービル8階848  
Email: hello@jastj.jp

会長 室山哲也／事務局長 滝順一／編集長 瀧澤美奈子